第２章　第 1 次世界大戦とブレスト・リトフスク条約

UENO Toshihiko, e-mail: uenot@mc.neweb.ne.jp; URL: http://www.geocities.jp/collegelife9354/index.html

ロシアの暦　帝政ロシアはユリウス暦を使用していたので、西欧のグレゴリオ暦（西暦）に対し、18 世紀で 11 日、19 世紀で 12 日、20 世紀で 13 日遅れている。帝政崩壊の翌年、新政権が 1918 年 1 月 31 日の翌日を 2 月 14 日と定めて、ロシアの暦と西暦とが一致した。ロシア史では、通常、とくに断らない限り、1918 年 1 月 31 日までの日付はユリウス暦を用いている。したがって、2 月 27 日は、西暦では 3 月 12 日である。

1. 第 1 次世界大戦とロシア革命（日付はロシア暦）

1914 年 7 月 26 日	国会臨時会議で国会議長ロジャンコ、「ツァーリと忠良なる臣民の一体化」=挙国一致体制
1915 年夏	戦時下の困窮とロシア軍の敗戦→政府と国会の団結の崩壊→政府批判の激化と「国民信頼内閣」創設要求の高まり→内閣改造
8 月	ツァーリ・ニコライ 2 世、ロシア軍最高総司令官に就任、大本営をベラルーシのモギリョーフに移す
	国会内「進歩ブロック」の形成=国会議員の 3/4 が加入
	綱領=「国民信頼内閣」創設、改革と恩赦（政治犯釈放）の実施
1916 年 1 月以降	首相交代相次ぐ
	労働者のストライキ多発
10 月 17～20 日	ペトログラートで高物価・戦争反対ストライキ
12 月	政府、反対派に対する抑圧を開始
1917 年 1 月以降	ペトログラートで断続的にストライキとデモ
2 月 23 日	ペトログラートの騒乱状態激化
25 日	ツァーリによる第 4 国会停止勅令（上下両院「休会」令）の発令
27 日	国会、同日朝、停止勅令受領。国会議員、国会臨時委員会創設
深夜	国会、政府省庁の接収を実施
	ツァーリ、首相ゴリツィンの電報により、首都の反乱を知り、軍に首都進撃を命じるも、兵士が動揺し、軍は命令遂行不可能に
28 日	国会臨時委員会、新政権成立のアピール
3 月 1 日	臨時政府成立
2 日	ニコライ 2 世、弟ミハイールへの譲位を決意
3 日	ミハイールは即位を辞退→帝政崩壊

2. 臨時政府の対独戦方針とレーニンの「４月テーゼ」（日付はロシア暦）

2.1. 臨時政府の対独戦方針=戦争の継続

革命的祖国防衛主義

ドイツ軍への敗北はすなわちドイツ帝政への敗北である
その敗北は、ロシアの帝政を打倒し立憲共和制をうち立てようという 2 月革命の理念の敗北を意味する
→ドイツ帝政に敗北してはならない

臨時政府を構成する立憲民主党（Кадет）、社会主義者=革命家党（CP）、メニシェヴィキ（社会民主主義労働党メニシェヴィキ派）はもちろん、政府外のボリシェヴィキも「革命的祖国防衛主義」を主張

2.2. レーニン「4 月テーゼ」

①「革命的祖国防衛主義」の否定
②対臨時政府協調主義の否定
③「全権力をソヴィエトへ！」
ボリシェヴィキ、夏までに「革命的祖国防衛主義」から「4 月テーゼ」路線に転換

2.3. 臨時政府の権威の低下

①戦争に勝利できない→軍隊および地方に対するコントロールを失う
②社会的緊張の激化（経済崩壊と戦争継続が原因）
③コルニーロフ反乱（1917 年 8 月）
反乱にカデットが関与の疑い・ボリシェヴィキの協力なくして反乱の鎮圧できず→臨時政府の権威の失墜→ソヴィエト内の対臨時政府協調派の影響力低下（ソヴィエトのボリシェヴィキ化）
④ペトログラート駐留兵士の反政府意識の激化
兵士の厭戦気分の増大、兵士は前線への出発望まず

2.4. ボリシェヴィキの権力奪取=休戦へ

1917 年 10 月 25 日　ボリシェヴィキに指導されたペトログラート守備隊・赤衛隊の武装蜂起（重要拠点の占拠）
武装蜂起指導機関→ペトログラート・ソヴィエト軍事革命委員会（議長トロツキー）
深夜　第 2 回全ロシア労働者・兵士代表ソヴィエト大会
エスエル、メニシェヴィキ、武装蜂起に抗議して退場
ボリシェヴィキ、左翼エスエル中心に議事進行
□ソヴィエト政権樹立を宣言
□「平和についての布告」と「土地についての布告」を採択
「平和についての布告」=講和交渉の即時開始をすべての交戦国の政府と国民に提案し、講和の条件は、無併合、無賠償、民族自決とし、さらに秘密条約の公表と休戦協定の即時締結を提案
□臨時労農政府＝ソヴィエト政府＝人民委員会議（ソヴナルコム Совнарком）樹立

3. ブレスト・リトフスク講和条約（日付は西暦）

＊「共産党」は、正確には 1918 年 3 月までは、ロシア社会民主労働党ボリシェヴィキ派、その後、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）と改称、ソ連邦結成後に、全連邦共産党、さらにソ連邦共産党となる

3.1. 休戦・講和交渉の開始

1917.12.15　ロシアと、ドイツ、オーストリア・ハンガリー、イタリアとの休戦協定調印

ロシアは、連合国政府に対して講和交渉に参加するよう要請したが受け入れられず、単独講和に踏み切る

3.2. 講和交渉

ドイツ側は、「無併合」を受け入れたかに見えたが、実際には占領地域を「民族自決」を名目にロシアから分離することの承認を迫る

1917 年 12 月 31 日　ロシア政府（人民委員会議）、交渉引き延ばしを決定
1918 年 1 月 12 日　日本海軍、居留民保護の名目で、ウラジヴォストークに軍艦 2 隻を派遣
15 日　ロシア政府、赤衛隊を基礎に赤軍を組織する命令を公布
21 日　ロシア政府首相（人民委員会議議長）レーニン、「併合主義的単独講和の即時締結に関するテーゼ」を共産党幹部会議で発表し、ドイツ側の条件に基づいて講和条約を直ちに締結することを主張
　会議出席者の半数は、「革命戦争」を支持
　1/4 は外務人民委員トロツキーの「戦争もせず講和もせず」の折衷案を支持
24 日　共産党中央委員会、9 対 7 でトロツキー案を採択
2 月 9 日　ドイツ、ウクライナ中央ラーダ政府（民族主義政府）と講和条約締結を前提に、ロシアに最後通牒
　トロツキーは 1 月 24 日の中央委決定の方針に従い交渉を打ち切り、帰国
16 日　ドイツ、18 日より戦闘再開を通告
18 日　共産党中央委、7 対 5（棄権 1）でドイツ案受諾を決定
23 日　ドイツ、講和条件を提示
　ウクライナ、バルト 3 国の独立承認を迫る内容
　回答は 48 時間以内
24 日　共産党中央委 7 対 4（棄権 4=トロツキー含む）でレーニンの主張が採択され、講和受諾を通告
　徹底抗戦を主張するブハーリンら反対派、派閥「左翼共産主義者」を結成
3 月 3 日　講和条約調印（ロシア側全権はソコリニコフ）
15 日　第 4 回全ロシア・ソヴィエト大会、講和条約を批准

トロツキー、軍事人民委員に就任、赤軍建設へ

この頃　連合国側は、ロシアの単独講和締結を非難

英国軍、ムルマンスクに上陸

4 月 5 日　日本軍、ウラジヴォストークに上陸

8 月下旬　補足協定締結（賠償金の支払い）

なぜ過酷な条約を受け入れたか

①革命の防衛（「革命的祖国防衛主義」とは異なり、休戦して革命を防衛する）

②ドイツはやがて連合国に敗北する

③ドイツ国内でやがて革命が起こる

（とくに②と③は「交渉引き延ばし」論の根拠ともなったが。③はとくに楽観的予測にすぎなかった）

講和条約の教訓

①戦争には勝たなければならない

②講和交渉を有利に進めるためにも強力な軍事力が必要

→強大な赤軍の建設へ

4. 内戦・干渉戦争

4.1. チェコ・スロヴァキア軍団との衝突

チェコ・スロヴァキア軍は、オーストリア・ハンガリー帝国からのチェコ・スロヴァキアの独立を望んで、自発的にロシア軍に投降し、捕虜となった

ブレスト講和後、シベリア経由で帰国することになったが、武装解除するか否かでロシア側と対立し、ウラルからシベリアにかけてシベリア鉄道沿線で武装蜂起

これに呼応して、国内の反共産党勢力が武装蜂起

4.2. 列国の干渉戦争の始まり

1918 年夏、日・米軍、チェコ・スロヴァキア軍支援の名目で、シベリア侵攻を開始し、東シベリアを占領。英国軍、ムルマンスクから上陸侵攻し、白海沿岸のオネガ、アルハンゲリスクを占領

4.3. 干渉戦争の終わり

1919 年 11 月 8 日　英国首相ロイド・ジョージ、ロシアの平和を主張。13 日には下院で経済封鎖を非難

1920 年 1 月 16 日　連合国、対露経済封鎖を事実上解除

2 月 12 日　捕虜送還に関する英露協定